



東日本大震災から 15 年 大規模災害における活動の記録

林 一 博

建設現場では「当たり前の安全」を支える保安安全用品が、震災を通じて人命を守る真の役割を持つ。全国各地で起きている災害時に人々の安全を守る安全保安用品を改めてご紹介する。

キーワード：災害，震災，保安安全用品

1. 震災前の日常

私は保安用品の販売、レンタルを行う会社に勤めている。主な商品は、道路や工事現場でよく目にするセーフティコーンやコーンバー、看板、電光掲示板、そして工事規制車といったものだ。私たちの会社はこれらを建設工事現場や、イベント会場に届け、設置方法、点検、引き取りまでを担っている。普段は現場の安全を支える裏方のような存在で、誰もが「当たり前」にあると思っている備品ばかりである。しかしその「当たり前」が途絶えたとき、人の命にどれほど大きな影響を与えるか、私はまだ実感していなかった。震災前までの日常は穏やかだった。営業し、建設現場から発注が来れば商品をそろえて搬送し、レンタル期間が終われば回収する、その繰り返し日々の仕事であり、そこに深い意味を考える余裕はなかった。建設現場での保安用品の役割を頭では理解していた。

例えば現場におけるセーフティコーンの列は通行人にとっては単なる「邪魔な赤い障害物」に映るかもしれない。だがそれがあるだけで、車の進入が防がれ、事故を未然に防ぐことができる。電光掲示板が一つあるだけで、交通の流れは大きく変わる。工事規制車の一台が現場にあるだけで作業員の安全は何倍も確保される。だが、それらを実感することは少なかった。安全は「守られて当たり前」であり、事故や災害が起きない限り、その有り難みは人の目に触れにくいからだ。私自身も「商売道具」としてしか扱っていなかった節があった。

会社の倉庫には、大小さまざまな保安用品が整然と並んでいた。新しい商品が入荷するとき独特のにおい、トラックの荷台に積み込むときの金属音、そして

夕方になれば社員同士で交わす何気ない会話。帰宅すれば家族が迎えてくれる。それが私の日常だった。

繁忙期には現場からの急な依頼も多く、夜遅くまで対応に追われることもあった。

疲れはするが、お客様からの「ありがとう、助かったよ」と言われると、不思議と報われる気持ちになった。そうした日々が、これからも変わらず続いていくとを、どこかで信じて疑わなかった。だが、2011年3月11日、その意味は、根底から覆されることになった。

2. 地震発生

その日は東北各地の責任者が仙台に集まり、定例の会議を開いていた。終盤に差しかかった頃、突然、床が大きく突き上げられた。蛍光灯が大きく揺れ、壁がぎしぎしと音を立て、時計が外れそうに揺れた。誰かが「地震だ!!」「外へ出ろ!!」と叫ぶ。だが、ただの地震ではなかった。立ち上がろうとしたが、足元が波を打つように揺れて、立つどころか椅子や机にしがみつくとぐらいしかできなかった。机の下に潜ろうとする者もいたが、机ごと左右に動かされるような激しさで、皆必死だった。私たちは2階の会議室から階段へ向うも揺れは収まらず、階段はまるで振子のように左右にうねり、私は、足を踏み外してしまい、階段から転げ落ち、背中を強く打ち息が詰まる。

それでも、「ここで止まってはいけない」と自分に言い聞かせ、何とか立ち上がって駐車場へ駆け出した。誰もが声を失い、ただ必死に耐えていた。

外に出ても状況は変わらなかった。アスファルトが波を打つように揺れ、会社向かいにある大きな倉庫の壁は音を立て崩れ落ち、車は跳ねるように上下し、社

員たちは互いに支えあいながら耐えた。私もようやく外の冷たい空気を吸込み「助かった」と心の底から思った。

その時は誰も津波がくるとは想像もしていなかった。

3. 津波との遭遇回避

その後、社員全員は帰路についた。私はまず、会社の新入社員を自宅まで送ることを優先した。入社したての事も、家族も心配しているだろうと考えたからだ。落ち着くためにいつもどおりCD音楽を聴きながら車を走らせた。これが今思うと失敗だった。

津波警報が出ているとは考えもせず、車を走らせるが渋滞に巻き込まれ、新入社員の自宅手前で引き返すことにした。私も家族が心配で帰路に就くが、またもや渋滞、動くに動けない状態がつづいた。そこへ道路わきの倉庫から木製パレットが道路に流れてだしてきた。最初は「水道管か何か破裂し水があふれてきたのだろう」と考え、流れてくるパレットを車窓から見ていた。そのうち渋滞中の車にパレットが「コツンコツン」と当たり始める。若干の恐怖を感じ始めた。そこでラジオに切り替えて（大津波警報）を知った。

「これは逃げなければならない」、渋滞がわずかに緩和した瞬間を逃さず前へ前へと進む。バックミラーに映った光景に息をのんだ。車が次々と浮かび上がり、まるで紙切れのように押し流されていく。道路全体が濁流にのまれていった。それが津波だった。

結果的に新入社員自宅手前で車をUターンしたタイミングが生死を分ける判断となった。もしそのまま、Uターンしないで、帰路についていたならば、私の車の後方に見えた数多くの車と同じように、津波に



写真—1 本社屋上から撮影 震災直後2011年3月11日16時21分

のまれていたに違いない。後に振り替えれば、あの瞬間の判断は奇跡のようなものだった。社員を途中下ろし、私自身は必死に帰路についた。バックミラーに映る車が流されていく光景は、今も瞼の裏に焼き付いて離れない（写真—1）。

4. 震災夜

会議に来ていた社員は新幹線で帰る予定だったが公共交通はすべて止まっていた。

夜が近づき、街は停電で闇に沈んでいく。

私は、彼らを探しに、駅周辺、市役所周辺と探すが見つからず、ちょっとした瞬間に電話につながり再会することができ、自宅に泊めることにした。

家に戻ると電気もガスも止まり、暗闇と冷え込みが待っていた。家族は既に避難をしていた。懐中電灯の明かりだけが頼りだった。暖房はなく、唯一残った酒を飲んで体を温めながら、余震に怯えて夜を過ごした。

しかし、ここからが本当の試練だった。電話は一切つながらず家族とも、社員とも連絡が取れなくなる。このとき詳細な情報は入ってこず、何が起きているのかわからないまま、不安だけが募っていった。

5. 震災翌朝

翌朝、会社へ向かう途中の光景は忘れられない。道路は泥だらけで、水がまだ残っている。家々の一階は水に浸かり車はあちこちに乗り捨てられ、畑には漁船が転がり、信号機は沈黙のまま。人々は泥に足を取られながら無言で歩き、視線はどこにも定まらない。

街全体が色を失い、そこに広がるのは地獄絵図だった（写真—2）。

ようやく会社へたどり着いたとき、私は膝から力が抜けそうになった。倉庫は津波の被害を受け、内部は泥だらけだった。整然と並んでいたはずの保安用品は押し流され、コーンやバー、看板は泥水の中を漂っている。電光掲示板も倒れ、工事規制車は車体の半分が水に浸かったまま動かなくなっていた。それは、私たちの「仕事の道具」であると同時に、まさに「安全を守る砦」が崩れ去った光景だった（写真—3）。

だが驚いたことに、流された保安用品が人々の手で拾い集められ、道路の緊急規制に使用され、泥にまみれたコーンが避難路を示し、折れた看板が「立入禁止」を伝え、コーンやバーがバリケードとなり、電光掲示板が危険区域を知らせる。

新品でなくとも、それは人命を守る「境界線」となっ



写真一 2 本社付近・近隣道路状況



写真一 3 本社・製品倉庫内 2011年3月14日8時26分撮影

ていた。

「商売どころではない、使えるものは全部使ってくれ」利益より命が優先されるのは当然だ、そんな思いだった。後日、その時に使われていた保安用品が感謝と御礼のメモを添えて返却され、その光景に胸が熱くなり、商売道具ではなく人を救う道具だ。

安全を守ろうとする人々がいる一方で、信じがたい光景もあり、震災翌日、火事場泥棒の姿を目にし、破壊された建物に入り込み、物を持ちさる影。命を守る人々と並んで、その対比はあまりにも醜悪で見えてい

れなかった。胸が締め付けられる痛みで、言葉も出なかった。

さらに追い打ちをかけたのは放射能汚染だった。原発事故の影響で、レンタル中の保安用品が高線量区域に取り残され、線量計の値では基準値を大きく振り切る区域の為、その場に進入することもできず、返却不能のものも多く、回収を断念せざるを得なかった。避難経路を守ったコーンやバー、工事規制車までもが、人が近づけないまま現場に置き去りになる。その矛盾が胸に突き刺さる。

やがて、現場では除染作業が日常となり顧客からの製品返却時に、保安用品を線量計測定器で確認しながらの毎日。普段は当たり前作業が、放射能の恐怖に覆われる。

その時私は、保安用品の役割が単なる整理や規制ではなく、「命を守る境界線」であることを骨身にしみて理解した。

6. おわりに

震災を通じて私は、保安用品の真の役割を改めて知り、コーン1本、看板1枚が人を危険から遠ざけ、命をつなぐ道を示す。

そして、人の心も支えになった。

返却された泥だらけのコーンと共に届いたメモ、社員同士が互いに支えあった夜、家族を案じながらも職務を果たした日々、そこには確かに「人情」があった。

安全を守るということは、命を守ること、そして命を守る先には、人と人との絆がある。

震災で得たその実感は、今も私の心に刻まれている。

JICMA

【筆者紹介】

林 一博 (はやし かずひろ)
 (株)仙台銘板
 営業本部 関西営業部
 執行役員 関西営業部長
 (東日本大震災当時 東北ブロック
 ブロック長 (仙台勤務))

